

2016 年度 卒業プロジェクト

「自家用車におけるインターネットに接続された
車載パーソナルアシスタント HMI の研究」

増井俊之研究会

学籍番号：71346711 環境情報学部 4 年 名児耶均基

論文要旨

Internet-connected In-Vehicle Personal Assistant HMI (Human Machine Interface) for Private Vehicle.

目次

第一章 研究背景と目的	4
1.1. 研究背景	4
1.2. 研究目的	4
1.3. 本文書の構成	4
第二章 先行事例および関連研究	6
2.1. 先行事例・関連研究	6
2.1.1 カーセキュリティ分野	6
2.1.2 インフォテイメント分野	6
2.2. 本研究の新規性と予想される効果について	6
第三章 システムの提案と実装	8
3.1. システムの概要	8
3.2. システムの構成	9
3.3. システムの実装	10
3.3.1 <i>Twitter</i> のタイムライン監視機能	10
3.3.2 カーセキュリティ機能	11
3.3.3 位置情報の取得機能	11
第四章 評価	12
4.1. 評価	12
4.2. 考察	12
第五章 結論	13
5.1. 本研究によって得られた成果	13
5.2. 今後の課題と展望	13
謝辞	14
参考文献	15

第一章 研究背景と目的

1.1. 研究背景

近年、希少価値の高まっている旧式のスポーツカー等を狙った盗難事件が多発しており、イモビライザー¹等の盗難防止装置の付いていない車両は、特に駐車中の車両盗難やいたずらが不安である。

旧式のスポーツカー等を所有するような車が好きな人間にとって、マイカーは言わば家族や恋人のような存在であり、車と常に繋がっているような安心感があればそのような不安は払拭されることが考えられる。

しかしながら、市場に出回っているカーセキュリティ装置は高価であり、更に取り付けにも専門知識を要する。いたずらや窃盗行為の振動や犯人の接近を検知して警報音を出すような物が多く、万が一車両を盗難されてしまった場合は為す術がない。また、GPS を用いて愛車の位置情報を参照したり、PHS/3G 等のデータ通信回線を用いて異常を通知したりするものは一部のハイエンドモデルに留まる上、月額料金や位置情報の参照の度に料金を請求されるというのが現状だ。

安価で小型のコンピューターやセンサー類が手に入るようになっており、それらを組み合わせて応用すれば、既存の物と比較して更にスマートでインタラクティブなカーセキュリティ装置を実現できるのではないかと考えた。

1.2. 研究目的

本研究では、自家用車における独自のヒューマンマシンインタフェース（HMI）を設計・構築することにより、主に窃盗行為に対する不安を低減し、車と繋がっているような安心感を生み出すことで、より快適なカーライフを送ることが出来るようにすることが目的である。具体的には、自家用車に、センサー等を接続した小型のコンピューターを設置し、いたずらや窃盗行為を所有者に通知する。また、所有者が HMI と対話することのできる機能を用いて、所有者が HMI の盗難通知をオン・オフしたり、所有者からの問い合わせに対しても、HMI が車両の位置情報の情報等を返したりする。

1.3. 本文書の構成

本稿では、第一章にて本研究の背景と目的について述べた。第二章では、先行事例および関連研究、この研究の新規性と予想される効果について述べる。第三章は、具体

¹ 盗難を防止するための電子的なキー照合システム

的なシステムの提案と実装方法を論述する。第四章では、評価および考察を行い、第五章では本研究の総括をする。

第二章 先行事例および関連研究

2.1. 先行事例・関連研究

本研究と関連する先行事例や研究を紹介する。

2.1.1 カーセキュリティ分野

市販のカーセキュリティ装置の多くは、前述のように、いたずらや窃盗行為の振動や犯人の接近を検知して警報音を出すような物に留まる。加藤電機「HORNET 370V」「NEW iVIPER」等、一部メーカーの高価なモデルには、GPS と PHS/3G 等のデータ通信回線を用いた、異常の通知機能・位置情報の参照機能を搭載したものがある。

また、警備会社の提供する「ココセコム」と呼ばれるサービスにも、愛車に機器を取り付けて位置情報を参照できるものがある。

いずれにしても通信サービスの月額使用料や位置情報取得にも都度料金がかかる。また、機器の取り付けにも専門的な知識と複雑な配線作業が求められるため、導入が難しいのが難点である。

2.1.2 インフォテイメント分野

スマートフォンやパーソナルコンピュータの分野で Apple の「Siri」や Microsoft の「Cortana」のような擬人化された一般消費者向けボットが増えているⁱように、自動車のインフォテイメントシステムの分野においてもパーソナルアシスタント機能が増えている。例えば、BMW のインフォテイメントシステムである「iDrive」には、「スピーチ・コントロール」機能があり、自然言語処理や AI を利用したナビゲーションの設定や音楽の選曲、タイヤの空気圧やオイルの状態などの車両コンピューターの情報を参照することも可能ⁱⁱとなっている。また、アフターマーケットの商品では、ユピテル社の GPS&レーダー探知機「Lei03」では、「霧島レイ」というキャラクターが音声案内を通して、ゲーム感覚で安全運転をサポートするⁱⁱⁱという商品も販売されている。

このような、デジタルボットを介した対話型のユーザー体験が増えているのは、デジタルボットが機械の操作を簡単にするだけでなく、まるで人物とコミュニケーションをとっているような体験を作り出すからである。味気のない機械に「人間らしさ」を付加することで、便利さと親近感を生み出す手法と言えよう。

2.2. 本研究の新規性と予想される効果について

本研究の HMI では、センサーや通信モジュールを取り付けた小型軽量ボードコンピ

ューターを車内に設置する方式を用いる。この方法では、常時電源を車両側ヒューズ等から供給するだけで良いため、既存のカーセキュリティと比較して導入が非常に簡単である。また、車両に依存しない外付けのシステムであるため、旧式の自動車にも導入が簡単であり、手軽にセキュリティを向上させる手法としての利用価値は非常に高いと考えられる。そして、近年増えている MVNO の格安 SIM カードや、「SORACOM Air」等の IoT デバイス向けのデータ通信 SIM を活用すれば、前述のような既存のカーセキュリティと比較して位置情報の取得にかかる通信料金を安価に実現することができるだろう。

機械的なプロダクトにキャラクターのイメージがあると愛着が湧くというのは音声合成ソフトウェア VOCALOID の「初音ミク」の成功を見ても特定の愛車自体の擬人化は pixiv とかでみるくらい

Twitter 等の SNS プラットフォームを介して自分の車と対話する HMI はかつて存在せず、新規性が高い。この方式では、サーバーを自分で用意することが必要ないというメリットもある。自動車という機械を擬人化し、インターネットと接続し、いつでも車両の位置情報やいたずら・窃盗行為の兆候を知ることのできる機能を持たせることで、ユーザーの不安の低減とマイカーへの愛着心を生み出し、より快適で安心感のあるカーライフを送ることが出来るようになるだろう。

第三章 システムの提案と実装

3.1. システムの概要

このシステムでは、自家用車の車内に小型軽量ボードコンピューターを設置し、愛車に異常があれば、その旨をインターネット経由で持ち主に通知し、GPS で取得した車両の位置情報を参照できるようにする。

システム（ボット）と持ち主間の対話には **Twitter** を使用し、加速度センサーを用いた車両のいたずら・盗難の兆候を検知する機能のオン・オフ、および位置情報の参照をリプライのツイートによって実現する。

今回の **HMI** ではマイカーを擬人化し、パーソナルアシスタントとして愛車の様子を見守るという設定にした。擬人化のイメージをわかりやすくするために、オリジナルキャラクターを用意した。著者の名前である「均基（まさき）」と、愛車である「マツダ・RX-8」のエイトを振り、「真咲エイト」と命名した。以下がそのキャラクターと著者の愛車の写真である。



図 3.1: 本システムをイメージしたオリジナルキャラクターである「真咲エイト」



図 3.2: 著者の愛車である「マツダ・RX-8」

3.2. システムの構成

ハードウェアのメインボードには、小型軽量ボードコンピュータの「Raspberry Pi 3 Model B」を採用した。インターネットに常時接続するために Huawei 製の USB 接続の 3G データ通信モジュール「EMOBILE GD03W」を用いた。SIM カードには株式会社インターネットイニシアティブの「IIJmio データ通信専用 SIM」を用いた。これにより、月額税抜き 900 円での運用が可能になる。

車両の位置情報を取得するための GPS モジュールには、U-blox 社の「NEO-6M」を搭載した UART 通信が可能なモジュールを使用した。また、受信感度を向上させるために GPS モジュールに汎用のアクティブアンテナを接続した。Raspberry Pi と GPS モジュールの通信には GPIO の UART のシリアル通信を用いている。

車両のいたずら・盗難の兆候を検知するための加速度センサーには、3 軸加速度センサーモジュールの「ADXL345」を使用した。Raspberry Pi と加速度センサーモジュールの通信には I²C のシリアル通信を用いている。

ソフトウェア環境には、Raspberry Pi Foundation の公式オペレーティングシステムシステムである「Raspbian」の最新版、「Raspbian Jessie with PIXEL」を用いた。そして、ボットプログラムの開発には Python 言語を用いている。

システムの構成図は以下のようにになっている。

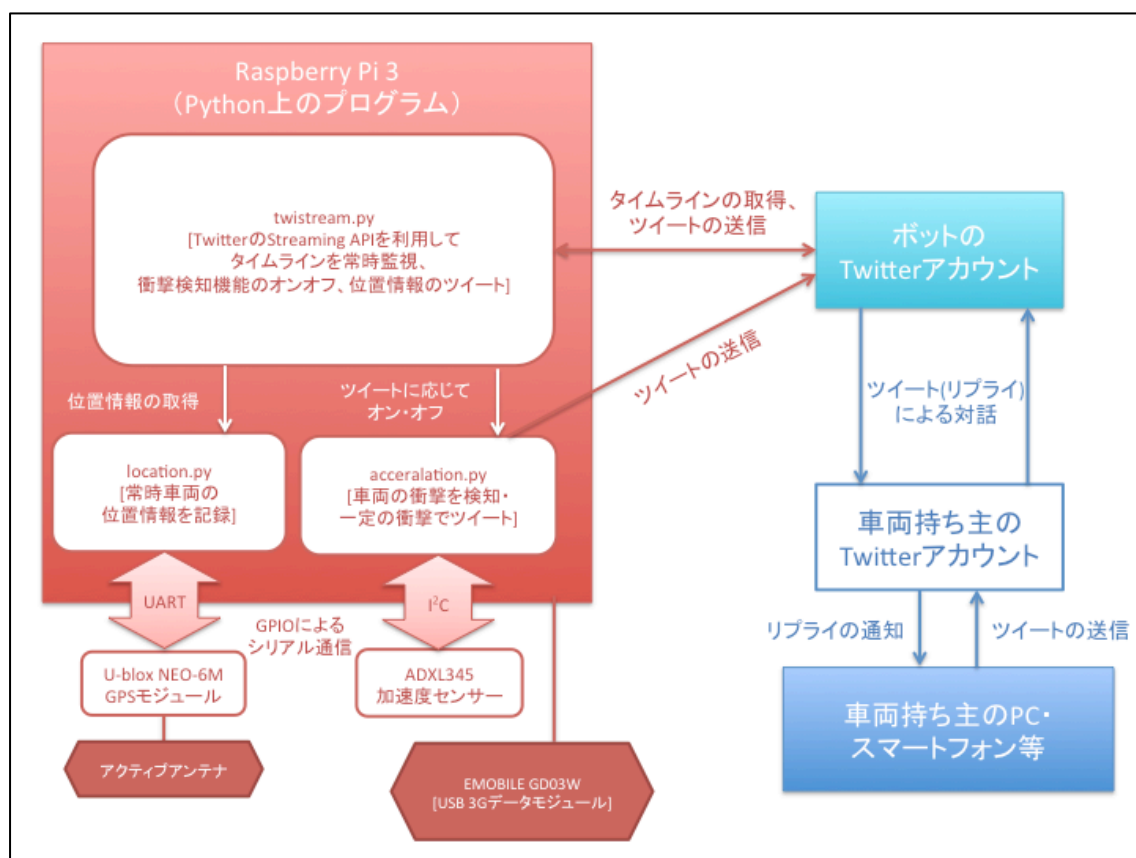


図 3.3: システム構成図

3.3. システムの実装

まず、HMI ボット用の Twitter のアカウントとして@raspi_car_sec を作成した。

ボットの機能として 3 つの大きな機能を用意した。以下が各機能の詳細と実装方法である。

3.3.1 Twitter のタイムライン監視

今回のシステムでは、Twitter を介してユーザーと対話するため、Twitter の Streaming API を用いて常時リプライの監視を行っている。それを担うプログラムとして、「twistream.py」というメインプログラムを実行している。Python 上で Twitter を扱うライブラリとして「TwitterAPI」(<https://github.com/geduldig/TwitterAPI>)を用いた。メインプログラムを実行すると、同時に後述の位置情報を常時記録する「location.py」を別のスレッドで実行している。

「twiststream.py」では、Twitter のリプライを常時 Streaming API で監視しており、特定ユーザー（車両持ち主、今回の場合は著者の大学用の TwitterID である@knps_sfc）のリプライに含まれる特定の文字列を判定して、所定の動作を行うようになっている。

3.3.2 カーセキュリティ機能

愛車がいたずらや窃盗行為の脅威にさらされた時の為の通知機能である。Raspberry Pi に接続された加速度センサー「ADXL345」を用いて、一定の加速度があれば車両の持ち主にリプライを送信する。これにより、持ち主は素早い初期対応を行うことが可能になる。持ち主がボットに「オン」、「ON」、「on」というワードの入ったリプライを送信することで、「acceralation.py」のスレッドが実行され、この機能を有効化することができる。また、持ち主が「オフ」、「OFF」、「off」というワードの入ったリプライをボットに送信することでこの機能が無効化される。機能のオン・オフの際にはその旨のツイート（リプライ）が持ち主に投稿されるようになっている。Python 上で ADXL345 を扱うライブラリには「ADXLpython」(<https://github.com/pimoroni/adxl345-python>)を使用している。ADXL345 上で 0.1 秒の間に 0.05G の加速度変化があると持ち主に通知するようにした。これは、ドアを開閉する程度の揺れから適切なしきい値を算出したものである。

3.3.3 位置情報の参照機能

「twiststream.py」の実行時に自動起動される「location.py」により、Raspberry Pi に接続された GPS モジュール「NEO-6M」の位置情報を 30 秒毎にテキストファイルに書き出している。Raspberry Pi 上で GPS を扱うアプリケーションとして「GPSD」(<https://savannah.nongnu.org/projects/gpsd/>)を利用した。「twiststream.py」で記録された位置情報を読み込み、持ち主から「位置」、「どこ」というワードの入ったリプライが来ると、位置情報の埋め込まれたツイートを時間と共に持ち主宛に呟く。位置情報のツイートには Twitter Rest API エンドポイントのパラメーターである、「lat」に緯度の情報を、「long」に経度の情報を、「display_coordinates」に「true」をそれぞれ付加することで正確な位置情報を投稿している。

第四章 評価

4.1. 評価

確かな安心感を得ることが出来た。セキュリティ機能をオン・オフする度に、キャラクターに和まされた。自分だけのオリジナルキャラクターがアシスタントをしてくれるという優越感があった。Twitter を用いてボットと対話するのは、著者のような Twitter のヘビーユーザーには使いやすい方法であったが、手動での認証が少し面倒であったのも事実である。

広い駐車場で愛車の場所を知りたいときにも便利だった。しかし、GPS の取得ができないことがあった。

4.2. 考察

安価で導入の簡単なカーセキュリティとしては非常に便利であるが、いたずらや窃盗を行う者に対する抑止力にはなっていない。アラームなんかがあっても良かったのでは？ Twitter 上で対話した効果は？

第五章 結論

5.1. 本研究によって得られた成果

本文

5.2. 今後の課題と展望

機械学習やAIの機能をパーソナルアシスタントに組み込むことが出来れば面白いと思った。車両側のデータ等と統合して様々な操作が出来ると嬉しい

今回の実装では、愛車から自発的にリプライを送ることが、愛車がいたずらや盗難の兆候があるときのみであった。一定時間以上車に乗らないと定期的に愛車が自分にメッセージを送る。これにより、愛車との一体感。車に乗りたいという気分させる。

手動での認証が面倒であったため、Bluetooth の Beacon を用いた近接検知が出来れば更に便利で快適だった

謝辭

参考文献

i

ii <http://diamond.jp/articles/-/87944>

iii <http://lei-kirishima.jp/sp/lei03/>